

英語テキストの結束性を高めるための語順：副詞的な要素の分析

A Perspective to Word Order to Heighten Cohesion in English Text:

An Analysis of “Adverbial Group”

相川 由美[†]

Yumi AIKAWA

Abstract:

The purpose of this study is to investigate the appropriate position of adverbial group within a sentence to heighten the cohesion of text or discourse. In general, adverbial group is very different from the other sentence elements, that is, subject, verb, object and complement, and they are the most peripheral of all the clause elements, and are heterogeneous category. Consequently, grammarians have generally not paid much attention to the position of adverbial group, importantly. Halliday (1994) and Halliday and Hasan (1976) studies from the viewpoint of text or discourse, accordingly, we need consider as the position of adverbial group from the point of view of heightening the cohesion of text or discourse. Moreover, we examine the relationship between the degree of cohesion and the position of adverbial group in text, using written text, and apply the Theme-Rheme relationship to our analysis at the same time.

1. はじめに

日本人英語学習者が英文を書く際、副詞的な要素を文のどの位置に置くのかは、ある程度規則があるため、それに従う訳だが、実際のところ、学習者によっては何となく置く場所を決めているように思われる。特に、場所や時間を表す句のような副詞的な要素、いわゆる前置詞句と言われる要素は文頭に置く傾向が見られる。これは日本人の場合、日本語の影響を受けた結果だろう。しかしながら、こういった要素は文頭文末どちらに置いても意味が異なる訳ではない。そのため、授業中の指導と言えば、どちらでもよいと言うしかない。そして、その文の状況や文の前後関係から考えてみるように、という助言をする。

また、英文を読む際に、文の様々な位置に出てくる副詞

的な要素を目の当たりにし、文法書に書かれている説明だけでは腑に落ちず、中にはなぜこれがここにあるのかと考え込んでしまう学習者もいる。その場合も、文章全体から見て、前後関係や意味のつながりを考えたら妥当な位置に置かれているはずだという答えをするが、日本人にとって、副詞的な要素の扱いは非常に厄介なものと思われる。

上記のような状況を見てきて、筆者は次のようなことを考えた。まず、副詞的な要素は文のどの位置に置かれたとしても意味は同じなのだろうか。なぜ、その位置でなければならないのだろうか。その位置である必然性はあるのだろうか。また、これらを考える場合、文章、つまりテキストと言う単位で考えなければならない。それは、文というものは文脈の中でその文脈に応じて使用されるものだからである。そして、こういった副詞的な要素が文の中で、または、テキストの中で置かれる位置と文章全体の意味の

[†] 愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

まとまりには、何らかの関係があるのだろうか。

そこで、本稿では副詞的な要素が文のどの位置にあるかによって、文の持つ情報がどのように異なるのかを分析する。また、これをテキストという単位で検討することにより、文のどの位置にそれらを置くと、よりテキストの意味の首尾一貫性が保てるかについても検討する。ただ、副詞的な要素と言っても幅広い種類が存在するため、今回は主に前出のように、前置詞と名詞の組み合わせである『前置詞句』に絞って議論する。また、筆者はこの分析を行うのに、選択体系機能言語学における理論を用いる。その理由については以下に述べることにする。

2. 選択体系機能言語学におけるテキスト内の情報の捉え方

言語とは日々、人々が生活していくのに必要不可欠なもので、言語なくして人間の活動は成り立たないだろう。そして、現実社会の中で人々は、自分が属している、直面している状況に合わせて最も伝わりやすい言い方でことばを使用している訳である。このことから、言語を使用する際重要視されるのは意味であると言える。もちろん、伝統文法や生成文法に代表される理論言語学で用いられる、文法的に正確な文構造の把握は重要である。ただ、実際に言語を使用するという状況から言えば、やはりその内容が重要である。選択体系機能言語学は、このように言語の持つ意味機能を重視した理論と言える。

2.1 選択体系機能言語学とは何か

龍城（2006：1-3）によれば、この理論を最初に提唱した Halliday の考えの中心は「社会の中で使われている言語の機能」である。つまり、話し手が自分の目的に応じて、最も適切な方法・表現を選んで、相手に対して言うなり書くことなので、こういった視点から見れば、言語の見方が変わってくると言える。そして、Halliday はその表現が使われた状況（context）をその表現とともに示す必要があると考えており、それを文化のコンテキスト（context of culture）と状況のコンテキスト（context of situation）という2つの概念で説明しようとした。よって、Halliday は使用されている言語を分析の対象とした機能主義（functionalism）の立場に立って言語使用のお

けるコンテキストの理論化を進めていったのである。その結果、Halliday は言語を多角的に見るという分析法を取るようになり、これが言語のメタ機能（metafunction）と呼ばれる概念だが、これはつまり1つの文を3つの視点から分析する方法である。そうすることで、その文がことばの外の世界とどのように関係しているか示そうとしている。

また、Halliday の理論では文という術語に対して節（clause）という述語を用いている。これは、主語（subject）定性（finite）と呼ばれる文法要素を含む単位のこと、ピリオドで区切られる文と区別をしている（龍城 2006：3）。今後、節という述語が出た場合、このように考えることにする。

これに加えて、テキスト（text）についても一言触れておく。ここで言うテキストとは1つの概念を言語で具現化する意味的なまとまりのことで、彼はテキストを意味の集合と考えている。意味を与えているのは節であるが、その節の1つ上に意味を構成するものとして考えている。そして、意味の集合として構造、内容の首尾一貫性（coherence）、その状況に働きかける機能、話題などの展開、そのジャンルの特性を持っているものでなければならないとしている（龍城 2006：4）。

2.2 テキストの結束性

2.1 で見たように、テキストとは意味の集合であり、テキストが首尾一貫性を持って構成されていることが、テキストをテキストとして成立させると言える。よって、ここではテキストの首尾一貫性と関連のある、テキストの結束性について議論する。これは、テキスト内の副詞的な要素について議論する際、重要な概念となる。

Halliday and Hasan（1976）は、テキストの結束性（cohesion）に関して基本的で一般的な概念を提案しているが、2.1 で述べた事柄と同じように、文の数に関係なく、また書き言葉であっても話し言葉であっても全体がまとまっていなければならないし、さらにテキストはテキスト性を持っていなければならない、持っていなければテキストとは言えないと述べている。これに関して、以下に簡単な例を挙げる。

(2) Wash and core six cooking apples. Put them into a fireproof dish.

(Halliday and Hasan 1976:2)

(1)において、下線部の両者は前方照応の関係であり、この関係が2つの文に結束性を与えていて、テキスト性は両者の間に存在する結束的な関係によって与えられている。

また、Eggins (1994:95) はテキストにテキスト性をもたらすテキストの連続性について言及している。

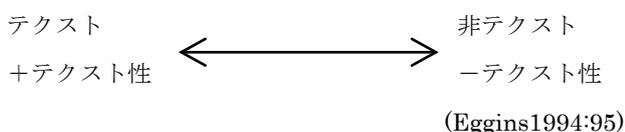


図1 テキストの連続性

図1から言えるのは、テキストとは白と黒がはっきり区別できるものではなく、テキスト性というものが連続性を持っているものとして捉えるべきであるという点だ。そして、このEgginsの考えはテキストの結束性に当てはめることができると考えられる。というのは、結束性とはまさにテキストのテキスト性のことだからである。よって、彼女の考えを基にすると、次のように考えることができるだろう。

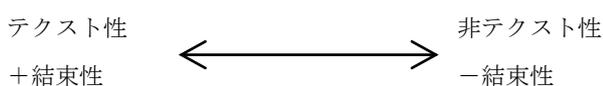


図2 テキストの結束性とテキスト性の関係

以上のことから、テキストをテキストとして成立させるものがテキスト性であり、それがテキストの結束性と大きく関係していることが理解できる。

さて、Halliday and Hasan (1976:4) は結束性に関して最も重要な概念とは、意味的なものであると述べているが、彼らによると、結束性とは談話の中である要素の解釈が談話内の別の要素に依存している場合に起こるもので、ある要素の意味に依存しないとその要素の解釈は上手くできないという点で、ある要素は別の要素を前提としているということである。これが起こると、結束性の関係が引き起こされ、2つの要素は相互関係を持つようになる。こ

れにより少なくともテキストは全体にまとまったものとなる。このことから、テキストとは構造的なものではなく意味的なものなので、結束性の概念もまた構造的なものではなく意味的なものだと言える。

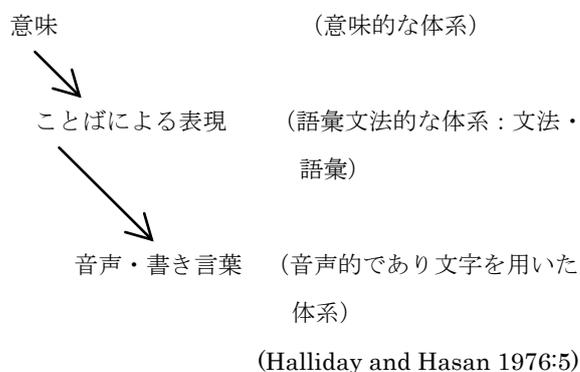


図3 言語の階層性

図1のように、言語は意味的、語彙文法的、音声的であり文字を使用している、この3つの体系が複合的にコード化されたものと言える。もっと簡単に言えば、言語の意味がまずことばによる表現で表され、そこから音声や文字として表出するため、このように作り出されたテキストは全体として結束的な関係でなければならず、結束性とは部分的には文法を通して、また部分的には語彙を通して表れるものとなる。

さらに、Halliday and Hasan (1976)は結束性を4つに分類している。具体的には、文法的な結束性として指示 (reference)、代用 (substitution)、省略 (ellipsis) の3種類、語彙的な結束性として接続 (conjunction) の4つである。また、Halliday (1994:334) はテキストの結束性を高めるために働いているのは以下の4つの特徴であると述べている。

1. 指示 (reference)
2. 省略と代用 (ellipsis and substitution)
3. 接続 (conjunction)
4. 語彙的な結束性 (lexical cohesion)

両者の分類はその内容が多少異なっているが、後に4が追加されたのは、語彙そのもので結束性が生み出されることがあると気付いたからだろう。

以上のことから、テキストをテキストたらしめるのに必要なのはテキストに意味のまとまりをもたらす結束性であり、様々な方法で結束性がもたらされるのである。

2.3 テキスト内の情報の意味

ここではテキストに結束性をもたらすための情報構造について概観する。選択体系機能言語学では言語のメタ機能を分析することとなるが、その中でテキストの意味の構成に関わるメタ機能はテキスト形成的機能 (textual function) と呼ばれている。龍城 (2006:85) はこれについて、「経験的意味と対人的意味を線上的 (linear) に捉えた時に生じる、節における単語 (語彙) 間の配列の問題である」と述べている。そして、テキスト形成的機能とは、テキスト全体の首尾一貫性を構成する重要な鍵となるものなので、テキスト形成的機能には単語間の関係、節と節との関係を示す意味、すなわちテキスト形成的意味が存在することとなるとも言っている。このことから、このテキスト形成的意味の解釈の仕方がテキストの結束性とも関係していると考えられる。

では、テキスト形成的意味とはどんなことか検討していくこととする。龍城 (2006:85-87) によれば、同じ意味や内容を伝えている節であっても、単語の配列が異なっていれば話し手は聞き手に何らかの意味の変化を伝達しようとして単語間の配列を変えたのだと考えられる。これを以下の節で考えてみる。

- (2) a. **The dragon** chased a unicorn in the sky.
- b. **In the sky garden** the dragon chased a unicorn.
- c. **A unicorn** was chased by the dragon.
- d. **By the dragon** a unicorn was chased in the sky.

(龍城 2006:87)

(2a-d)は全て同じ意味・内容を伝えているが、(2a)と(2b)はその単語の配列が異なっている。また、(2a,b)と(2c,d)は態による変化が見られる。これは話し手が聞き手に何らかの意味的变化を伝達しようとしているからこそ、こういった単語間の配列を変化させたと考えられる。このように

して生じた意味変化によって、話し手の意図する意味の変化が生じていることになる。こうして具現された意味をテキスト形成的意味 (textual meaning) と呼んでいるのである。

さらに、(2)のそれぞれの節の意味の解釈において、話し手が言いたいことが何であるか述べると、

(2a) dragon が unicorn を追いかけたという事実。

Dragon がどうしたのかについて。

(2b) その事件が起こった場所はほかならぬ空中庭園である。

(2c) 追いかけられたのは unicorn である。Unicorn がどうなったかについて。

(2d) dragon によって unicorn が追いかけられた。

となる。以上から、龍城は話し手が伝えたい意味・内容に関するテキスト形成的意味は、様々な異なる方法で伝えることができると述べている。

2.4 Theme-Rheme の関係と情報構造

前出の(2a-d)のように、単語間の配列によって話し手が伝えたいことは異なってくるのが分かったが、では節の先頭の要素がいかに重要で、これがテキストの結束性を高めるためにも大きな役割を果たしていることを検討する。

特に、英語の話し手は自分の言いたい内容や今現在話している内容を最初に持つてくる傾向にある。そのため、「何について話しているのか」や「伝えたいことは何か」と言う要素は常に節頭に具現するとされている。よって、(2)の太字の部分は各々の節で話し手が最も伝えたい内容だと言える。これを Halliday (1994) はプラグ学派が用いていた theme を借用し主題 (Theme) と呼ぶことにした。Theme とは、「メッセージの基点としての役割を果たす要素であり、話し手が語ろうとするもの」と考えればよい。そして、Theme に続く残りの部分を題述 (Rheme) と呼んでいる。そのため、節の情報は Theme と Rheme という 2 つの部分からなり、これら 2 つの配列によって節の情報構造が示される。そのため、(2)では太字の部分が Theme となり、話し手が最も伝えたい内容と考えられるので、テキスト構成上最も重要な意味を担う部分となる

話し手が自分の言っていることの妥当性に関わる責任を負わせる要素である。

(iii)行為者とは「表示としての節」の構造で機能するもので、節は表示つまり人間の内的・外的経験を何らかの過程として解釈するものとしての意味を持ち、節において参与要素となる。これは、話し手が何らかの行為をするものとして描き出す要素である。

これを Hori(1995 : 160)は次のようにまとめている。

(5) The duke gave my aunt this teapot.

Theme
Subject
Actor

(5) This teapot my aunt was given by the duke.

Theme **Subject** **Actor**

(6) My aunt was given this teapot by the duke.

Theme **Actor**
Subject

(7) This teapot the duke gave to my aunt.

Theme **Subject**
Actor

(8) By the duke my aunt was given this teapot.

Theme **Subject**
Actor

このような解釈の仕方をすることによって、節は様々な要素が混ざり合っ構成されているものだということが理解できる。また、一般的に学校で教えられている文法や理論言語学に基づく主語と、話し手のメッセージとしての節という概念に基づく主語には大きな違いがあることが理解できる。Theme は心理的主語と同義で情報の出発点となることから、一般的な文法における主語(文法的主語に当る)と Theme とはイコールの関係ではないと言える。これこそが、節内、およびテキスト内の意味に関する規則であると言えよう。

2.5 テキスト内での Theme-Rheme のパターン

Eggins(1994:30)は Theme の出現には 3 パターンあると述べている。第一に、最も基本的なものとして、ある要素が繰り返し出現してテキストのテキスト性を高めるもので、語彙的な結束性を用いてテキストの結束性を高める方法と言える。つまり、テキスト中の同じ要素が、規則的で基本的な Theme を作り出していると考えればよい。これと同じ形式については、Georgakopoulou and Goutsos (1997:123)が図 5 のように説明している。

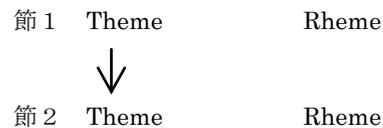
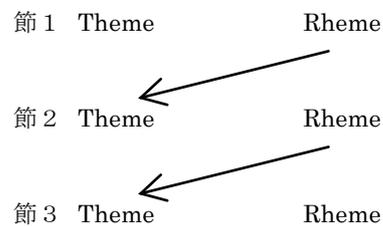


図 5 Theme の繰り返しパターン

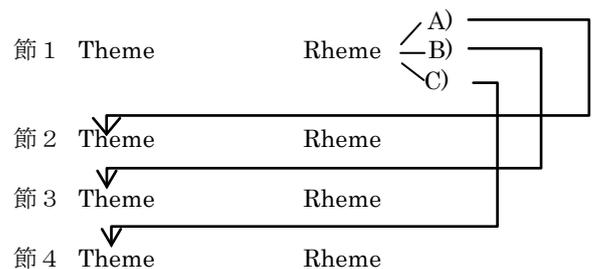
第二に、ジグザグパターンと呼ばれるもので、これは第 1 節の Rheme が第 2 節では Theme となり、第 2 節の Rheme が第 3 節の Theme となるというパターンの Theme である。



(Eggins(1994:303))

図 6 Theme のジグザグパターン

第 3 に、複合的主題 (multiple-Theme) パターンと言われるもので、第 1 節の Rheme が第 2~4 節それぞれの Theme となるパターンである。



(Eggins 1994:304)

図 7 複合的主題のパターン

以上の事柄から、テキスト内でテキストの内容に対して首尾一貫性を持たせるため、つまり結束性を持たせるために Theme-Rheme が効果的に使用されることが見て取れる。

2.6 まとめ

2.1 から 2.5 までで、節には 3 種類の主語が存在し、メッセージ、つまり話し手が伝えたいことと的確に述べるためにはその中の、心理的主語が大きな役割を担っており、それが Theme というメッセージの出発点となっていることが分かった。そして、この Theme がテキストをテキスト足らしめるテキスト性を生み出している。よって、テキストの結束性が保たれると言える。

加えて、語順ということについて言えば、語順には有標のものと無標のものが存在する。標準的でない語順を使用する場合、どの言語でもそこには話し手が伝えたいことに変化が生じていることになる。これはつまり、話し手が通常とは異なることを伝えようとしていることに他ならない。そして、新情報としての Theme の選択のしかたによって、自分の伝えたいことを的確に伝えようとするのである。そして、Theme を有効に利用することにより、テキストの結束性をより高めていると考えられる。これを踏まえて、次に実際のテキストに当てて特に、通常とは違う有標の語順を中心に分析を行っていく。

3 テキスト分析

本節では、テキストの結束性と節中の副詞的な要素の位置の関係について、実際のテキストを分析しながら議論を進めていく。今回、本稿では文および節単位の分析ではなく、談話単位での分析を行うこととする。これは、ある一定の長さを伴ったテキストの中にある節の語順から、語順がテキストの結束性にどのような影響を与えているのかを見るためだからである。また、1 で述べたように、学習者が英文を書く際、文中の副詞的な要素を文のどの位置に置くか迷って、感覚的に判断している状況を目の当たりにしてきたことが本稿の出発点のため、今回は副詞的な要素に関する分析にとどめることとする。

そして、2 でも述べたようにテキストの結束と節頭の関係に着目するため、今回の調査では、副詞的な要素の中でもいわゆる前置詞句のみを調査の対象とする。ただし、前置詞句の中でも、of を用いたものについては Halliday(1994:213)が典型的な前置詞句ではないと述べているので、省くこととする。なお、副詞的な要素を文のどの位置に置くかについては、Quirk et al.(1985)が膨大な量のコーパスを用いて追求しているが、今回はこれについては触れない。

以下は小説の一部分を抜粋し、Theme-Rheme の関係を分析したものである。

(A) [clause1]

It wasn't real night yet

Theme Rheme

[clause2]

but the blinds were down in the dining room

Theme Rheme

[clause3]

and the lights turned on ...

Theme Rheme

[clause4]

and all the lights were red roses.

Theme Rheme

[clause5]

Red ribbons and bunches of roses tied up the table

Theme Rheme

at the corners.

[clause6]

In the middle was a lake with rose petals floating

Theme Rheme

on it.

[clause7]

'that's where the ice pudding is to be.'

Theme Rheme

[clause8]

said Cook.

Theme Rheme

(Mansfield :278)

例 (A) は物語の中盤の段落である。この物語の場面は登場人物が生活しているある家にある部屋で、この状況の元で物語が進行していく。筆者は我々読者にこの部屋の中での出来事を語ろうとしている。この場面は主にダイニングルームでの出来事を述べている。節6には場所を表す前置詞句が用いられているが、この節において前置詞句は倒置されている。倒置とは言うてみれば、有標の語順である。そして、この Theme も有標の Theme となるので、筆者が特別強調したい部分だと言える。ゆえに、節頭に Theme を置いたと考えるのが妥当である。

このように考えると、有標のものがテキストの結束性を損なっているように見えてしまうが、この Theme である前置詞句 *In the middle* には定冠詞 *the* がある。この *the* は節5の *the table* を受けているのは文意から明らかなので、2. 2のテキストに結束性を持たせる手段の中の指示 (reference) に当たるため、テキストの結束性には問題を与えるものとはならない。同時に、節6の Theme が前節の Rheme 中の要素を受けているため、このことは、新情報から旧情報へ情報が受け取られたことになる。この情報の流れもまた、テキストの結束性を高めるために必要だと言える。まとめると、テキストの中で特に強調して伝えたい部分を有標の語順と Theme を用いて表現したが、テキストの結束性を持たせるため、指示という方法を用いることと、新情報から旧情報への情報の流れを生かし、このテキストの結束性を高めていると考えられる。以下に、例 (A) の Theme の出現パターンを示す。これにより、筆者がどのように情報を伝えようとしているのかが理解できる。

(B) [clause3]

and the lights turned on ...

Theme Rheme

[clause4]

and all the lights were red roses.

Theme Rheme

[clause5]

Red ribbons and bunches of roses tied up the table

Theme Rheme

at the corners.

[clause6]

In the middle was a lake with rose petals floating

Theme Rheme

on it.

[clause7]

'that's where the ice pudding is to be.'

Theme Rheme

(ibid.)

では、別の例を見ていく。

(C) Edmund, forty-seventh Baron Badgery, was a lineal descendant of that Edmund, surnamaed Le Blayreau, who landed on England soil in the train of William the Conqueror. Ennobled by William Rufus, the Badgerys had been one of the very few baronial families to survive the Wars of the Roses and all the other changes and chances English history... No Badgery had ever fought in any war, no Badgery had ever engaged in any kind of politics. They had been content to live and quietly to politics. They had been content to live and quietly to propagate their species in a huge -machicolated Norman castle, surrounded by a triple moat, only sallying forth to cultivate their properly and collect their rents. (1) In the

Theme 1

eighteenth century, when life had become

Theme 2

relatively secure, the Badgerys began to venture

Rheme

forth into civilized society. From boorish squires they blossomed into *Grands seigneurs*, patrons of the arts, virtuosi. Their property was large, they were rich: and with the growth of industrialism their riches also grow. Villages on their estate turned into manufacturing towns, unsuspected

coal was discovered beneath the surface of their barren moorlands. (2) By the muddle of the

Theme

nineteenth century the Badgerys were among the

Rheme

richest of English noble families. The forty-seventh baron disposed of an income of at least two hundred thousand pounds a year.

(Huxly:292)

例 (C) において、下線部が節頭に前置詞句が置かれている節について、Theme-Rheme の関係を示したものとなる。第 1 に、(1) において節頭の前置詞句は時間を表す意味を持っている。(1) より前のテキストの部分では、Badgery 一家の歴史を述べている。一家に何が起こり、どのような経過を辿ったのかということが語られている。そして (1) の節が登場する。この節の Theme 1 は明らかに時間を表す前置詞句としての Theme となっている。筆者がこれを伝えたいメッセージの出発点としているわけである。なぜかという、筆者はここでこの一家の状況がどの時点で変化したのかを、はっきり述べるためだと言える。そして次に、Theme 2 が置かれている。これは、まず Theme 1 で具体的な時間を提示して、後に続く出来事があるのかを明確にしている。そして、Theme 2 を先に置くことによって、Rheme で述べられている事柄が、どのような状況が訪れた時に起こり始めたのかをはっきりと語っている。

この物語の内容から考えれば、それまで数々の逆境の中、苦勞し続けてきた一家の生活が、(1)の頃に変化し始めた訳である。筆者はその時間の区切りを読者に印象付けたことに違いない。そのために、有標の語順、有標の Theme を利用し効果を狙ったと言える。

(2) についても同様のことが言える。これも時間を表す前置詞句であり、これが節頭に置かれており、Theme と考えることができる。それは、この一家に「いつ」「何」が起こったのかの、「いつ」の部分の先に示すことにより、時間とともに一家の生活が確実に変化していったことを強調しているに違いない。

両者とも、具体的な時間を先に示すことにより、時間の

経過を分かりやすくしているようである。もし、これらの時間を表す前置詞句が、後ろに移動するとどうなるだろうか。そうすると、Theme-Rheme の関係が変化することになる。話し手が伝えたい内容の出発点が変わることになるので、その場合、具体的な時間の流れをあまり重視しなくなる。それによって、出来事が淡々と語られていくことになると思われる。

4 結語

3 の分析の結果を踏まえ、次のことが言える。まず、テキストと節頭の前置詞句の関係については、英語の場合、基本的には有標の語順を、テキスト中にあえて置くことにより、話し手が伝えたいメッセージを明確にすることができる。これは、メッセージの出発点としての Theme の働きを前置詞句が持つことになるためである。Halliday は、Theme を心理的主語と述べているが、まさに、意味・内容という点から言えば、節頭に置かれる要素が何であるかによって、話し手が伝えたい内容が変わってくるので、節頭にどのような要素を置くかは非常に重要である。

このことから考えれば、節頭の時間・場所を表す前置詞句は、場面を設定したり、時間を設定したりするのに大きな役割を担っているため、これらの配置の仕方によっては、筆者の伝えたい意味・内容のニュアンスが変わってしまうことも起きることがある。節頭に前置詞句を置くことは定型的な語順では有標であっても、テキストという観点からは無標であり、むしろ、自然であると言えるかもしれない。そうすることにより、筆者の伝えたい意味・内容が正確に伝わるのであれば、テキストの結束性が高められる語順と考えることができそうだ。

今後はさらに節頭に置かれる副詞的な要素について、テキストおよび談話という観点から分析を進めていき、文単位でなく、談話単位での語順の規則を見付け出し、その結果を英語のリーディングやライティングといった英語指導の場面に生かして行きたい。

出典

Huxley, A. "The Tillotson Banquet". In Phillis M.J. (ed.)

English Short Stories 1888-1937 (1973) London:
Oxford University Press. 291-318.

Mansfield, K. "Sun and Moon". In Phillis M.J. (ed.)
English Short Stories 1888-1937 (1973) London:
Oxford University Press. 276-283.

参考文献

Brown, G and Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. New
York: Cambridge University Press.

Egins, S. (1994) *An Introduction to Systemic
Functional Linguistics*. London: Pinter.

Georgakopoulou, A and Goutsos, D. (1997) *Discourse
Analysis: An Introduction* Edinburgh: Edinburgh
University Press.

Halliday, M.A.K. (1978) *Language as Social Semiotic:
The Social Interpretation of Language and
Meaning*. London: Edward Arnold.

Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to
Functional Grammar 2nd edition*. London: Arnold.
(山口登 笥壽雄 訳 (2001) 『機能文法概説: ハリデ
ー理論への誘い』東京: くろしお出版)

Halliday, M.A.K and Hasan R. (1976) *Cohesion in
English*. London: Longman.

Halliday, M.A.K. and Matthiessen, C.M.I.M. (2004) *An
Introduction to Functional Grammar, 3rd edition*.
London: Arnold.

Hori, M. (1995) "Subjectlessness and Honorifics in
Japanese: A Case of Textual Construal". In Hasan,
R. and P.H. Fries (eds.) *On Subject and Theme: A
Discourse Functional Perspective*. 151-185.
Amsterdam: John Benjamins.

Martin, J.R., Matthiessen, C.M.I.M. and Painter, C.
(1997) *Working with Functional Grammar*. London:
Arnold.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., and Svartvik, J.
(1985) *A Comprehensive Grammar of the English
Language*. Longman: London.

Thompson, G. (1996) *Introducing Functional Grammar*.
London: Arnold.

龍城正明 (1997) 「選択体系機能言語学における基本概念
と主要述語: transitivity の解釈を中心に」『言語』4
月号 東京: 大修館書店 pp.86-97

龍城正明 (2006) 『ことばは生きている 選択体系機能言
語学序説』東京: くろしお出版

山口登 (2000) 『選択体系機能理論の構図』小泉保 (編)
『言語研究における機能主義』東京: 大修館書店 p.
3-47

綿貫陽 宮川幸久 須貝猛敏 高松尚弘 (2000) 『徹底例
解ロイヤル英文法 改訂新版』東京: 旺文社

(受理 平成 25 年 3 月 19 日)